

新潟県の蛇紋岩製磨製石斧について

— 縄文時代前半期の生産遺跡と消費遺跡を中心に —

鈴木 俊 成

1 はじめに

遺跡に残された石器の多くは材料となる石（原石）を地元で獲得し、遺跡内およびその近隣で製作する自給自足的色彩¹⁾が強い。これに対し石器製品の製作工程を物語る工具・未成品および破片の出土がなく、原石も近隣で採取できない場合、これらの製品は遠隔の地で作られ、当地に搬入されたと想定される。この搬入品と目される石器の一つに磨製石斧があげられる。ここに磨製石斧の大量生産（生産遺跡）と消費遺跡への流通の問題が浮上する。

磨製石斧に使用された石材には報告書の記載を集めただけでも多くの種類²⁾が存在する。ここでは、これら多種類の石材を実物にあたりその岩石名を検証していくことはできないが、実態としては同石材を別名で呼んだり、またその逆もあると考えられ、報告者間の石材に対する統一³⁾が待たれるところである。このような状況の中にあって所謂「蛇紋岩」と呼ばれる石材は、糸魚川市長ヶ原遺跡〔藤田ほか1964〕などの硬玉製品および蛇紋岩製磨製石斧の生産遺跡の発見により、古くから研究者の認識するところで、その石質および色調・質感が極めて特徴的なことも合わせ、他の石材との識別を容易にしてきた。また、県内では「蛇紋岩イコール西頸城地方」と連想するくらい蛇紋岩製品が新潟県南西部⁴⁾から持ち込まれてきたものであろうとする考えは現段階でもくずれていない⁵⁾。

蛇紋岩製磨製石斧の大規模な生産遺跡は縄文時代中期前葉以降、新潟県長者ヶ原遺跡、寺地遺跡〔寺村・阿部ほか1987〕、十二平遺跡〔秦・寺崎ほか1990〕、富山県境A遺跡〔山本ほか1991〕、馬場山遺跡群〔山本ほか1987〕など良質蛇紋岩産出地周辺の新潟県南西部（西頸城地方）および隣接する富山県北東部に展開し、あたかも一極的とも言えるような生産地帯⁶⁾が形成される。このうち富山県側の状況については、山本氏（1991）の卓越した論考があげられる。氏は、大量生産遺跡の出現を中期前葉（新崎式）、大量生産の本格化を中期中葉以降とし、流通に関しても数百kmに渡る見通しを指摘し、蛇紋岩製磨製石斧生産とその流通に関する大きな流れを捉えることに成功している。また、寺地遺跡を整理した阿部氏はその報告の中で、中期（Ⅰ類）と晩期（Ⅱ類）の磨製石斧の形態差を抽出し、石斧の運搬経路（流通）が硬玉のそれと同様である可能性（特に晩期Ⅱ類）を指摘した。両形態の分布状況から両時期に「運搬経路・組織の相違」が存在するという社会情勢をも念頭におくもので、最近の新発田市中野遺跡の報文〔阿部1997〕の中で、氏の論考はさらに具体性を増している。両氏の論考は、磨製石斧という自給自足的色彩の薄い物体を媒体とし縄文時代物流社会の復元を目指したものとして高く評価されよう。

本書ではこれら先学の業績を踏まえ、蛇紋岩製磨製石斧を媒体にその生産と流通、そして消費遺跡の動態をも絡め、新潟県の縄文時代中期以前の様相を整理し、そこに見られる社会的情勢および生産・物流思考の一旦を明らかにしようとするものである。

なお、副題に用いた縄文時代前半期とは、縄文時代草創期から蛇紋岩製磨製石斧生産が一極集中し大規模生産遺跡が出現・安定する縄文時代中期までの時期幅をさす。また「生産遺跡」としたもののについては、

他遺跡への流通を前提に自家消費をはるかに超えた製作がおこなわれたと目される遺跡で、数量的⁷⁾な根拠の提示は難しいが、石斧の完形品以外、未成品や原石そして製作にかかわる工具および製作時に生じる剥片などの出土が前提となる。なお、擦切技法による石斧製作遺跡〔金子1969、前山1987・1994〕については、その生産量からして自給自足的色彩が強いと考えられる。ここでは一応生産遺跡から外しているが、その隆盛時期および分布など磨製石斧生産の一翼を成していたことは確実であり、後述する「4 生産遺跡形成の要因」の中で、若干触れてみたい。

2 生産遺跡の状況

ここでは、蛇紋岩製磨製石斧の生産にかかわったと思われる遺跡（生産遺跡）を列举し、その概要を記す。

(1) 縄文時代草創期・早期の様相

草創期・早期を通じ他遺跡へ製品を搬出する程度⁸⁾の生産遺跡⁹⁾は現在のところ発見されていない。しかし、長野県貫ノ木遺跡〔神林ほか1997〕・日向林遺跡〔谷 1994・1997〕のように旧石器時代から蛇紋岩を選択し、局部磨製石斧を多量に使用した遺跡の存在は、その技術的基盤・系統・分布の状況がおおいに気になるところである。また、後述するようにすでに縄文時代早期段階には磨製石斧が海岸部（特に県内の南西部では顕著）で高率出現する傾向〔鈴木1996・1998〕にあり、今後、海岸部に近い沖積地および丘陵部での生産遺跡の発見も予想される。

(2) 縄文時代前期の様相

現在までのところ、前期の初期段階から生産をおこなったとみられる遺跡が出現する。該当する遺跡は少ないが、海岸部近くに立地する場合が一般的である。

新谷遺跡（第1図）

巻町大字福井字新谷・宮ノ前に所在する。弥彦・角田山系の内陸側小扇状地に立地し、海拔は15m以下である。遺跡の広がり約50,000㎡と大きく、内847㎡が1983年に調査された。遺跡の時期は縄文時代前期前葉（花積下層式・二ツ木式後半段階・関山式前半段階）で、検出された遺構は焼土と小ピットである。これらは不明瞭ながら竪穴住居跡の可能性が指摘されている。出土石器は石鏃5、石槍1、礫石錘404、磨石・敲石類572、石皿147、打製石斧3、磨製石斧64（内破片が53）、磨製石斧未成品・剥片41、磨製石斧原石8、礫器4、石匙5、スクレイパー26、石錐1、ピエス・エスキューユ3、ハンマーストーン9、砥石類109、石核・剥片類180、玦状耳飾1である。磨製石斧の石材は細粒砂岩・粘板岩など多様であるが、大多数は蛇紋岩で占められる。磨製石斧の未成品、原石、製作時の剥片、蛇紋岩製の敲石など、本遺跡に原石が持ち込まれ蛇紋岩製の磨製石斧が生産されたことは明らかである。また、擦切技法による資料は皆無である。

四割・杉沢遺跡（第1図）

糸魚川市大字一の宮字四割・杉沢に所在する。長者ヶ原遺跡と同一丘陵上の尾根先端部付近に立地し、長者ヶ原遺跡から約50m北に位置する。検出遺構は土坑1、溝11、道路状遺構2で、土坑からは中期後葉の土器が出土している。出土土器は前期後葉から中期後葉の時期幅をもち、前期後葉（諸磯b）が主体である。前期後葉の土器は調査区の東側に集中出土し、石器も同様に集中して出土することから、同時期の所産と考えられる。



第1図 新谷遺跡 (1~8)、四割・杉沢遺跡 (9~18) 出土石器

出土石器は打製石斧4、貝殻状剥片42、磨製石斧8、磨製石斧未成品12、敲石(蛇紋岩)、砥石、石皿、研石2、磨石3、石錘、凹石5、敲石、勾玉1、装身具未成品1、玦状耳飾1であり、中期後葉の土坑SK03出土の磨製石斧(13)以外、ほとんどが出土位置から前期後葉に伴うと考えられる。磨製石斧未成品・敲石・砥石等の存在から磨製石斧生産が行われたことは確実であるが、生産の規模は小さい。

古町B遺跡

吉川町大字西野島字上脇原ほかに所在する。高田平野北端の沖積地に面した丘陵先端部に位置し、標高13m、沖積面との比高は5mである。遺跡面積は広大であるが、1993年に13,000㎡が調査された。出土土器は縄文時代前期後半の諸磯a・b式がほとんどである。検出遺構は竪穴住居跡5と10数基の土坑などであり、出土石器は石鏃47、尖頭器3、石槍2、玦状耳飾13、玉類3、石匙23、両極石器、石錘14、打製石斧3、磨製石斧73、砥石176、擦切砥石32、凹石・叩石・磨石204、石皿41、石棒、蛇紋岩原石が出土している。磨製石斧は蛇紋岩を主体に硬砂岩・閃緑岩が少量含まれる。蛇紋岩製の磨製石斧未成品・敲石・砥石・原石などの出土は、遺跡で磨製石斧生産がおこなわれたことを示している。しかも、かなりの規模をもった生産で、製品は自分で消費したほか、他遺跡に搬出された可能性が高い。

その他、柏崎市大宮遺跡〔柏崎市教育委員会1995〕・和島村大武遺跡〔新潟県教育委員会1997〕・青海町大角地遺跡〔寺村ほか1979〕が上げられ、前二者は本報告前である。大宮遺跡は縄文時代前期後半の集落跡で玦状耳飾と蛇紋岩製の磨製石斧を生産している。磨製石斧は原石を遺跡に持ち込み生産されるが、製品の一部は他遺跡へ搬出された可能性が高い。大武遺跡は縄文時代前期前葉の所謂「土器捨て場」で多量の土器・石器が出土している。石器の中には蛇紋岩原石と石斧、そしてその未成品などが含まれる。

前期には未だ生産遺跡が集中することなく、原石産出地およびそれ以外の地域に拡散した状況で、これらの生産遺跡は奇しくも海岸線上に分布する。資料が増加する過程で内陸部にも生産遺跡の拡大が懸念されるが、現段階では後述するような、消費遺跡で見られる磨製石斧需要の地域性と遺跡間の流通を考慮すれば、合理的な遺跡立地および分布を示しているものと理解しておきたい。

(3) 縄文時代中期初頭・前葉の様相

前期の海岸線上への生産遺跡の拡散分布は該期には維持されず、その地位は原石産出地域に移行する。後続（中期中葉）の大規模生産遺跡出現前夜の様相で、後述する磨製石斧の需要の変化と地域性、そして遺跡間ネットワーク確立の時期として重要な位置を占める。

五月沢遺跡

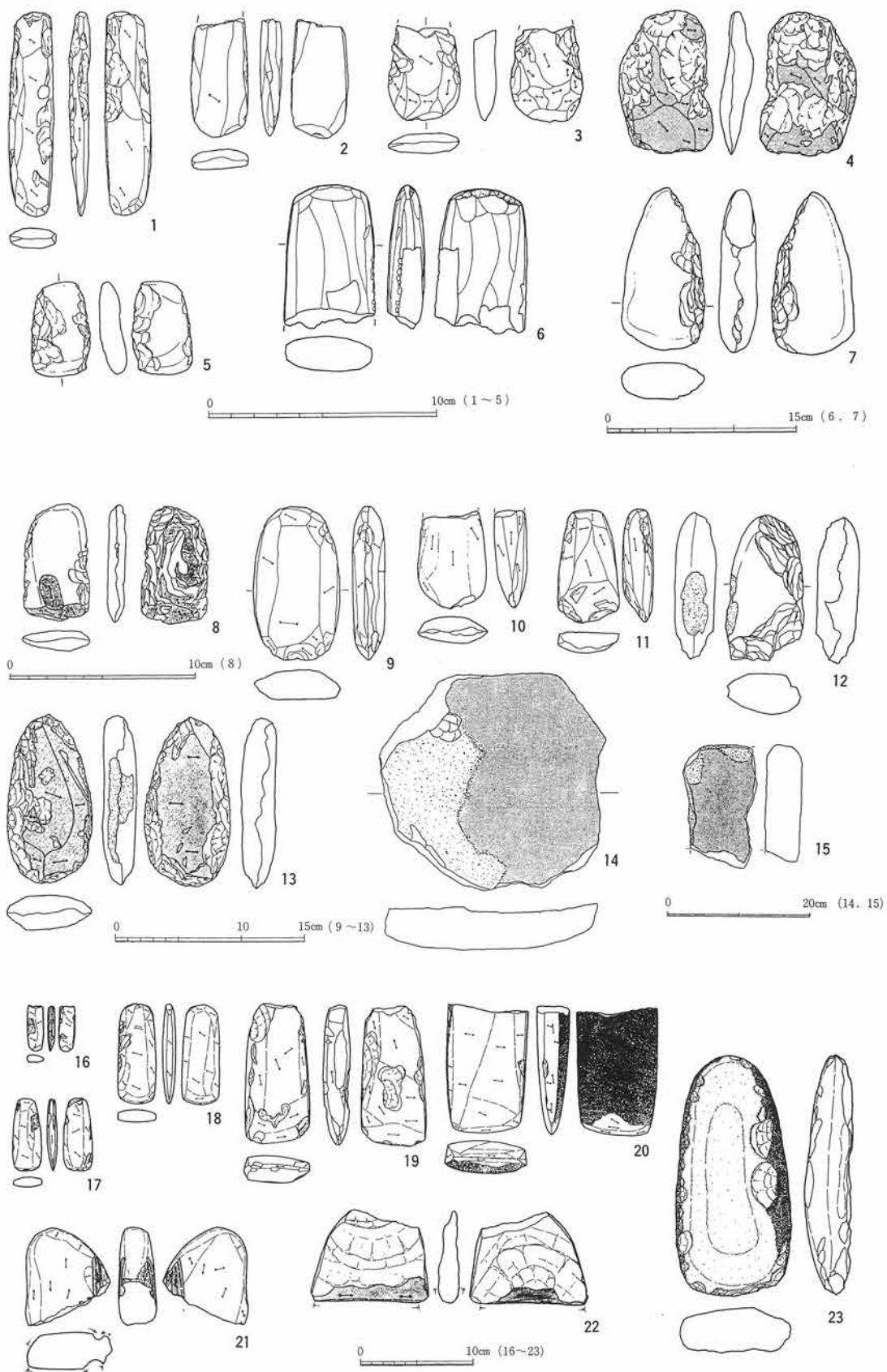
糸魚川市大字一の宮字五月沢・大增に所在する。長者ヶ原遺跡の東約300mに位置し、標高100～110mを測る姫川右岸の丘陵上に立地する。発掘調査は1991年に実施され、遺跡総面積約8,000㎡のうち4,500㎡を対象とした。縄文時代の遺構は住居跡3と数基の土坑である。遺跡の時期は出土土器から早期末・前期初頭～中期初頭で、遺構の大半は中期初頭の新保式に属する。早期末・前期初頭の遺物は中期初頭と分布域を異にし、玦状耳飾の製作をおこなっている。周辺の地形は、大小の沢により丘陵が解析され広い平坦部は少なく、調査範囲は丘陵尾根部が若干幅広となる部分である。遺跡は、全て調査したとしても地形的な制約から大集落になる可能性はなく、住居跡が数軒増加される程度と推定される。土器の時期幅からも短期的な遺跡である。

出土石器は石鏃12、石匙3、石錐1、スクレイパー6、石錘20、磨石類102、打製石斧15、磨製石斧25、磨製石斧未成品47（内14点に擦切り）、平・筋砥石18、石鋸34、砥石、石皿13、ピエス・エスキューユ2、玦状耳飾5（その他未成品1）、垂玉未成品1、四角柱状未成品1、原石（黒曜石・石英・メノウ・珪長岩・蛇紋岩・蛸石）・剥片類370が出土している。このうち玦耳飾については出土位置から縄文時代早期末～前期前葉の所産と考えられる。その他、玦状耳飾製作にかかわった砥石・磨石類の一部が該期の所産に含まれる可能性があるが極わずかで、大半は中期初頭に属するものと考えられる。磨製石斧の未成品・石鋸・砥石・蛇紋岩原石など磨製石斧生産にかかわる遺物が出土しており、成品および未成品の量から消費遺跡に搬出された可能性が高い。また、後続時期の長者ヶ原遺跡と比べ擦切技法を多用する傾向がある。

三屋原遺跡（第2図）

糸魚川市大字蓮台寺字塚ノ越・竹屋原に所在し、長者ヶ原遺跡の北方500mに位置する。標高70～80mで前記の五月沢遺跡の北東に存在する沢を隔てて、同一丘陵上に立地する。本調査は1986年におこなわれ住居跡1・土坑14・焼土4が検出された。住居跡および土坑は出土遺物や覆土の状況から、縄文時代前期末から中期前葉のものと考えられている。

出土石器は石鏃3、石匙2、スクレイパー1、玉2、スタンプ状石器、砥石7、磨製石斧11（未成品を含む）、打製石斧2、剥片石器？、石錘18、凹石4、敲石6、磨石6、石皿3である。磨製石斧未成品・



磨製石斧未成品 (3~5、7、8、12、13、16~20、23)
 擦切磨製石斧未成品 (21) 磨製石斧 (その他)
 石鋸 (22) 砥石 (14、15)

第2図 三屋原遺跡 (1~7)、三屋原B遺跡 (8~15)、長者ヶ原遺跡 (16~23) 出土石器

砥石等の出土から磨製石斧を製作していたものと考えられるが、小規模な生産であろう。

その他、時期は不明瞭であるが三屋原B遺跡があげられる。上記の三屋原遺跡の東方60mに沢を挟んで位置する。丘陵尾根上に立地し、住居跡状の遺構3・土坑14・溝2が検出され、各遺構の時期は出土遺物から早期後半～中期前葉の大きな幅が与えられよう。

出土石器は石鏃2、石錐1、玦状耳飾1、垂飾1、砥石2、磨製石斧16（未成品を含む）、打製石斧4、貝殻状剥片19、石錘8、凹石4、敲石2、磨石5、石皿2があり、磨製石斧は未成品が一定量出土したことから小規模な生産がおこなわれたことがわかる。

該期の生産遺跡にはいくつかの共通性がある。一つは遺跡の規模で、検出遺構や遺物出土量からけっして大規模な集落とはいえず、五月沢遺跡でみられるように住居が数軒の小規模な集落および一家族または数人規模の活動の場として認識される。もう一つはいずれも丘陵尾根状の狭い緩斜面に占地していることである。さらに磨製石斧生産量は後続時期に比べると決して多くはないが、相当量、他遺跡に搬出されたものと考えられる。

富山県東部の馬場山遺跡群など、遺跡の時期、立地、規模等共通性が見られる。このように該期の生産遺跡は新潟県南西部から富山県北東部にかけて、蛇紋岩の入手が容易な地域に集中する初源期で、遺構から見られる遺跡の規模は決して大きなものではないが、磨製石斧未成品等の数量から相当量生産され、他遺跡への搬出も頻繁におこなわれたと考えられる。

(4) 縄文時代中期中葉～後葉の様相

中期初頭からの原石産出地に生産遺跡が集中する傾向は継続され、大規模な遺跡で大量生産がおこなわれる時期である。

長者ヶ原遺跡（第2図）

糸魚川市大字一の宮字栗畑ほかに所在する。10回にわたる学術調査および整備事業にかかわる範囲確認調査が実施され、多くの遺物・遺構を発見し、硬玉製品・磨製石斧の生産などその特殊性と集落構造が徐々に解明されつつある。

遺跡は姫川右岸の丘陵上に立地し、丘陵尾根平坦地に長径約200m（南北）・短径約140mの楕円状の環状集落を形成するものと推定されている。出土土器は早期～後期と長い時期幅をもつが最盛期は縄文時代中期中葉から後葉にかけてである。集落の細かい構造、時期的な推移そして磨製石斧の生産状況など、今後の調査でさらに明らかになろうが、多量の磨製石斧とその未成品それに各種の製作道具の存在から、当該地域で最大級の磨製石斧生産遺跡と評価されるであろう。

『居住と生産、そして生産圏の拠点としての長期に営まれた結果と考えるべきであり—（中略）—「交易所・市場」としての側面も視野に入れるべきである。』〔木島ほか1997〕との調査姿勢は今後の長者ヶ原遺跡の生産遺跡としての側面をより明確にしてくれるものと期待される。

十二平遺跡

能生町鶴石593の2番地ほかに所在し、1989年に本調査が実施された。調査面積は990㎡で遺跡の中心部を調査している。遺跡は能生川左岸の丘陵上に位置し、標高は約50m、海岸からの距離は約2.5kmである。平坦部はわずかで、以下の遺構が密集状態で検出された。竪穴住居跡23、掘立柱建物1、袋状土坑3、ピット多数、石列1である。時期は中期前葉から後期前葉の幅をもっており、その中でも主体をなすものは中期中葉である。出土石器もこの時期幅で捉えられるが、打製石斧284（内52が未成品）、スクレイパー103、

磨石462、凹石147、石皿306、磨製石斧272（内152が未成品）、砥石784、叩石30、台石9、原石94（硬玉31・メノウ29・蛇紋岩33・頁岩1）、玉類12、石鏃11、石匙1、石錘15、石棒？が出土している。打製石斧未成品の中に磨製石斧未成品が存在する可能性があり、磨製石斧未成品の数量はさらに増加するものと思われる。

磨製石斧の出土量は、検出された住居数の割には少ない。しかし、蛇紋岩の原石・磨製石斧未成品・多数の砥石、硬玉製・蛇紋岩製の叩石など磨製石斧生産の一連の道具が出土し、玉製品をはじめ蛇紋岩製の磨製石斧を多量に生産した遺跡である。また、狭い範囲に密集した住居群は特徴的で、境A遺跡の様相に近似する。なお、磨製石斧の石材は全て蛇紋岩で擦切技法によるものが極わずかに存在する。

寺地遺跡（第3～5図）

青海町大字寺地2034番地ほかに所在し、1967年から1973年にわたり合計4次の発掘調査がおこなわれた。調査区はA・A'・B・C・D・E地区の6地区に分かれる。遺跡は中期～晩期にかけての大規模なものだが近・現代の攪乱を受けており、不明な部分が多い。しかし、蛇紋岩製磨製石斧を大規模に生産していたことは明らかである。以下に後続時期も含め概要を記す。

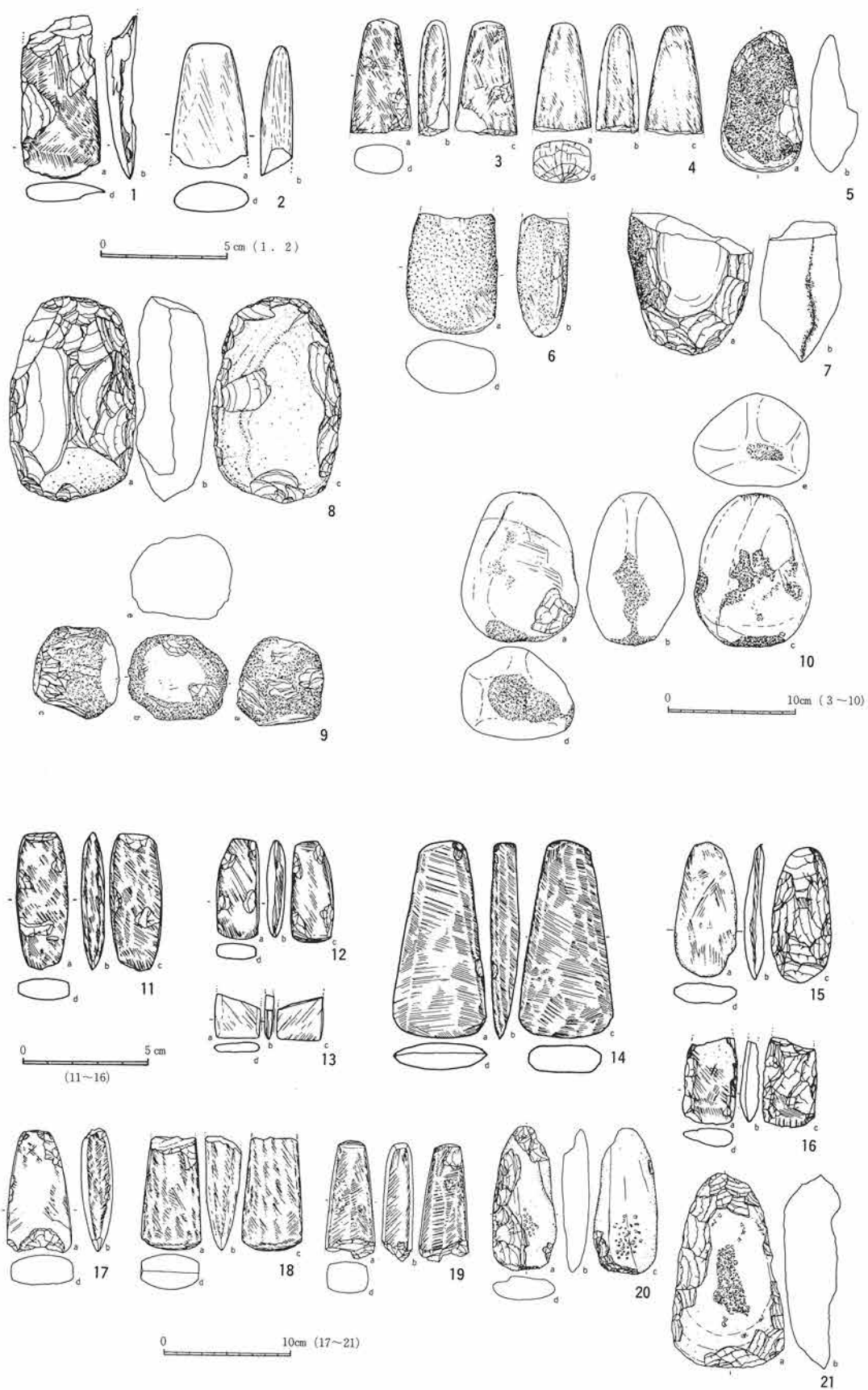
A地区は標高5～6mで縄文時代中期から晩期の土器が出土するが、晩期の前葉から中葉以外のものは極少数である。遺構は晩期前葉から中葉に属する配石遺構・木柱群が検出された。配石遺構からは骨片・焼骨が出土しており墳墓・祭祀場との見方が強い。配石遺構から出土した石器は石鏃3、尖頭器1、石錐1、打製石斧1、磨製石斧88（内未成品75）、磨石類49（その他硬玉敲石43）、石皿2、砥石42、石錘3、不定形石器2、玉未成品3、石核1、剥片19、硬玉原石39、硬玉片153、蛇紋岩原石2、蛇紋岩片20、その他の岩片46である。磨製石斧とその未成品、硬玉製品とその未成品、そして製作にかかわった砥石・敲石の多量な出土から磨製石斧生産と硬玉製品生産に携わった遺跡と考えられている。また剥片石器が比較的少ないことも上記を裏付けていよう。

木柱群と組石遺構は前者を祭祀施設、後者を石組墓と解釈している。

木柱群・組石遺構出土の石器は石鏃34、尖頭器4、石錘2、打製石斧9、磨製石斧382（内、未成品337）、磨石類246（その他硬玉敲石14）、石皿15、砥石195、台石2、石錘8、ピエス・エスキューユ3、不定形石器29、石製品37（硬玉製品5・玉未成品10・滑石玉2・石棒等20）、石核2、剥片161（その他硬玉剥片1182）、加工礫164、蛇紋岩原石16、蛇紋岩片687、蛇紋岩以外の岩片695、硬玉原石144である。配石遺構で出土しないピエス・エスキューユ、片刃打製石斧、小型砥石、台石、石刀、石冠を出土するが、磨製石斧・硬玉製品の生産関連の遺物を多数出土することから、配石遺構同様、生産跡と考えられる。配石遺構と木柱群・石組遺構の出土位置は隣接しており、遺構に伴う出土状況を示す石器はほとんどなく、包含層からの出土である。

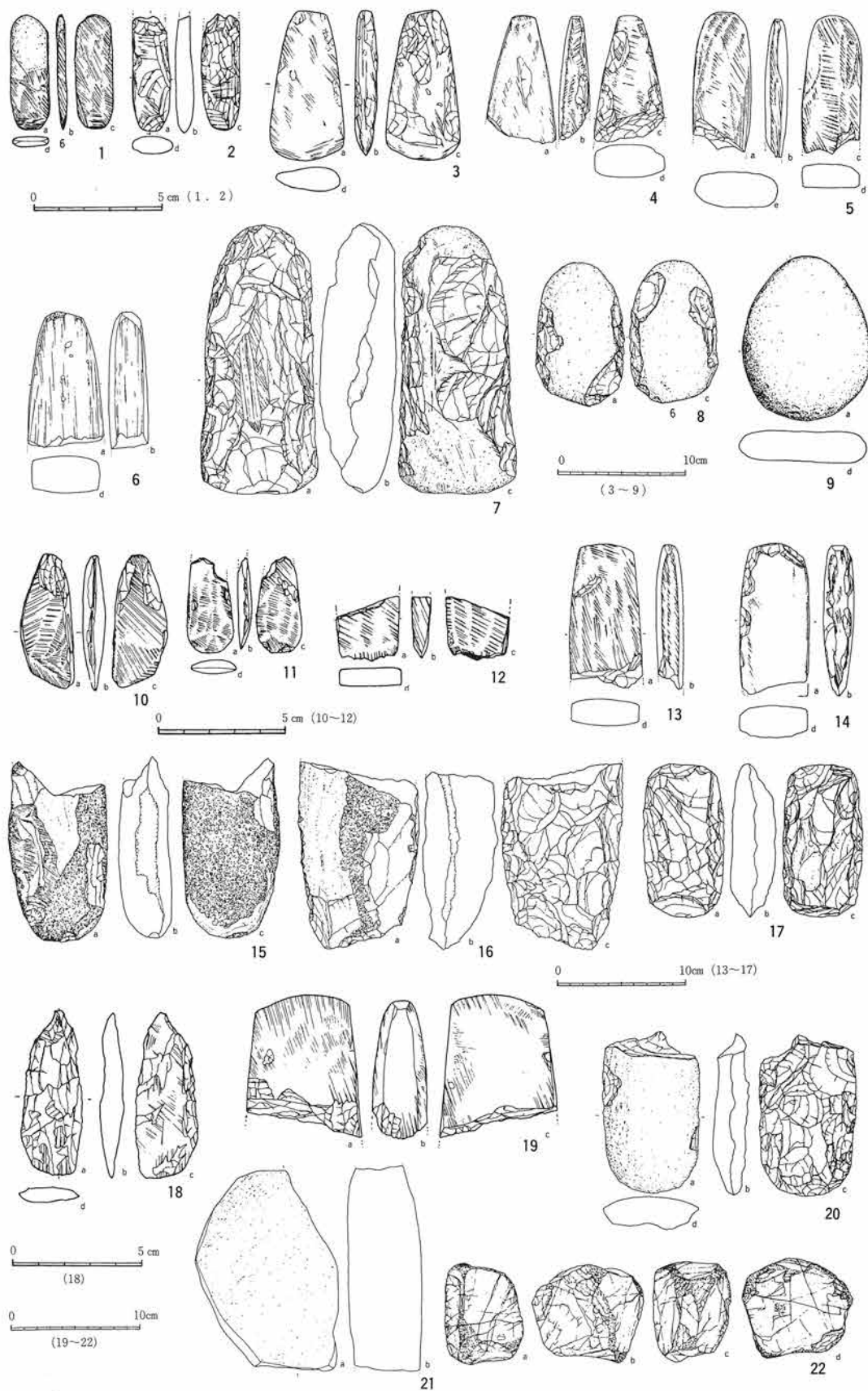
A'地区は配石遺構・木柱群・石組遺構の西側に隣接し、13軒の竪穴住居跡が発見された。出土土器は縄文時代中期中葉から晩期後葉である。工事や乱掘に対応した緊急調査のため、遺構の記録や遺物の採集が不十分であった。したがって、出土石器の数量については未記入であるが、蛇紋岩製磨製石斧の未成品や原石の出土が報告されており、生産の規模や生産時期は明確でないものの、蛇紋岩製磨製石斧の製作にかかわったと考えられる。

B地区は竪穴住居跡7軒が発見された。縄文時代中期から晩期のものである。遺物のほとんどは竪穴住居跡出土で、硬玉製玉類および蛇紋岩製磨製石斧生産の工房跡と報告されている。以下に住居の時期幅を記すが、それぞれの住居跡で蛇紋岩製磨製石斧の未成品および原石・剥片が出土している。石器組成（1・



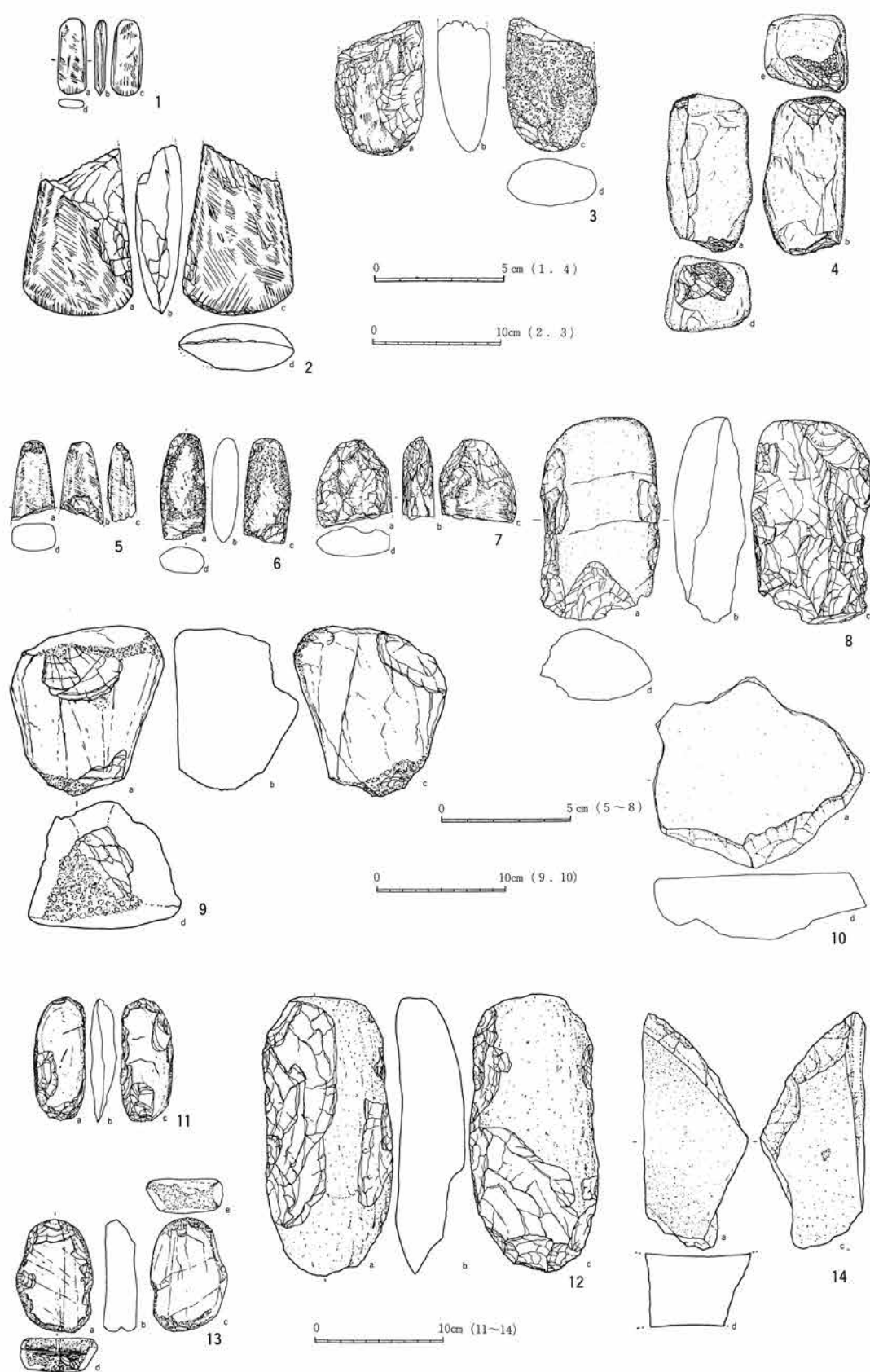
磨製石斧未成品 (5~8、15、16、20、21) 敲石 (9、10)
磨製石斧 (その他)

第3図 寺地遺跡 配石遺構 (1~10)、木柱群石組遺構 (11~21) 出土石器



磨製石斧未成品 (7、8、15~18、20) 蛇紋岩原石 (9)
砥石 (21) 敲石 (22) 磨製石斧 (その他)

第4図 寺地遺跡 A'地区 (1~9)、1号住居跡 (10~17)、3号住居跡 (18~22) 出土石器



磨製石斧未成品 (3、6～8、11、12) 磨製石斧 (その他)
砥石 (10、14) 敲石 (4、9、13)

第5図 寺地遺跡 4号住居跡 (1～4)、5号住居跡 (5～10)、6号住居跡 (11～14) 出土石器

3～6号住居跡)については表1参照。各住居の時期については以下に示す。1号住居跡(中期後葉 古串田新)、2号住居跡(中期から晩期)、3号住居跡(中期中葉～後葉、曾利・古串田新)、4号住居跡(後期中葉・晩期 大洞BC～C1)、5号住居跡(中期中葉)、6号住居跡(3・7号より古い、古府式)、7号住居跡(中期中葉、攪乱著しい)。

C地区は縄文時代中期と晩期に比定される土器が出土した。中期のものは中葉の天神山・古府式である。検出されたピットから住居跡と柵列が復元されるが、攪乱が著しく不明な部分が多い。出土石器も多くない。

D・E地区には遺物包含層はなく、遺物もほとんど出土しなかった。

その他、糸魚川市岩木遺跡・同入山遺跡〔木島ほか1997〕、名立町大イナバ遺跡〔秦・小林ほか1996〕があげられる。大イナバ遺跡は中期前葉から後期中葉の土器が出土し、中心は中期後葉である。磨製石斧生産も中期後葉がピークと考えられるが、同じく出土土器の時期幅から中期後葉以前に生産を開始していたと推測され、その規模も比較的大きなものと考えられる。

以上、蛇文岩製磨製石斧生産遺跡の状況を概説した。以下に前記した生産遺跡の分布および規模から三つの画期(I～Ⅲ期)を想定したい。なお、縄文時代早期以前の生産遺跡は現在のところ見つかっていないが、後述する消費遺跡で蛇紋岩製磨製石斧が出土する以上、生産に従事した遺跡の存在は否定できず、今後、これらの遺跡の発見と流通の解明が課題となる。その結果によっては、画期の新設および再編も考えられよう。

I期 時期的には前期から具体的な生産遺跡が出現するが、消費遺跡の状況から将来的にはそれ以前の時期で生産遺跡の発見が想定できる。分布は現在のところ海岸部に拡散して存在し、原石を直接遺跡に持ち込み製作する。遺跡の規模は当該期としてはその地域の中核的集落と考えられる。

Ⅱ期 中期初頭・前葉の様相である。分布はI期の広域拡散から原石産出地周辺に集約されてくる。立地は丘陵先端および峽幅の丘陵上で、平坦面の少ない地形を特徴とする。遺跡の規模も住居跡1から数軒である。後続期(Ⅲ期)の大規模集落で生産が開始される前夜の様相として重要な位置を占める。

Ⅲ期 中期中葉からの様相と考えられるが、一部Ⅱ期と時期的(中期前葉)に重複する可能性がある。長者ヶ原遺跡・境A遺跡など大規模な生産遺跡が出現する。生産遺跡の分布はⅡ期同様、原石産出地周辺に集中するが、十二平遺跡・大イナバ遺跡など原石産出地域の中にあって、Ⅱ期に比べ若干の拡散傾向が存在することも指摘しておきたい。遺跡の規模は県内でも有数な大規模集落、

表1 寺地遺跡出土石器

種 別	1号住居跡	3号住居跡	4号住居跡	5号住居跡	6号住居跡	備 考
石鏃	1	1				二次加工ある剥片・微細剥離痕ある剥片は不定形石器に含めた。
石錐						
ポイント	1	1				
ピエスエスキューユ					1	
石核	2					
磨製石斧	16	1	2	5		
磨製石斧未成品	21	4	1	14	3	
打製石斧	6	5	2	11	4	
石錐	1	1				
磨石類	29	5	8	22	10	
台石						
砥石	34	5	3	14	7	
硬玉砥石		4		1	2	
不定形石器	1	1		1	3	
加工礫	8	8	2	10		
剥片	73	29	7	49	14	
石製円盤	2					
石棒		1				
硬玉未成品	1					
硬玉荒割・剥片	36	15	10	4	3	
大珠	1					
大珠未成品	1					
硬玉原石	29	5	2		8	
蛇紋岩原石	17	1		7	1	
蛇紋岩片	113	51	29	87	40	
その他の礫・岩片	105	26	20	3	4	

表2 生産遺跡の状況

画期	時 期	分 布	遺跡の規模
I期	縄文時代前期(早期以前も可能性有)	海岸線に沿って広域分布	大・中規模遺跡
Ⅱ期	縄文時代中期初頭・前葉	原石産出地周辺に集中分布。峽幅丘陵上に立地	中・小規模遺跡
Ⅲ期	縄文時代中期中葉	原石産出地周辺に集中分布	中規模または拠点的大規模遺跡

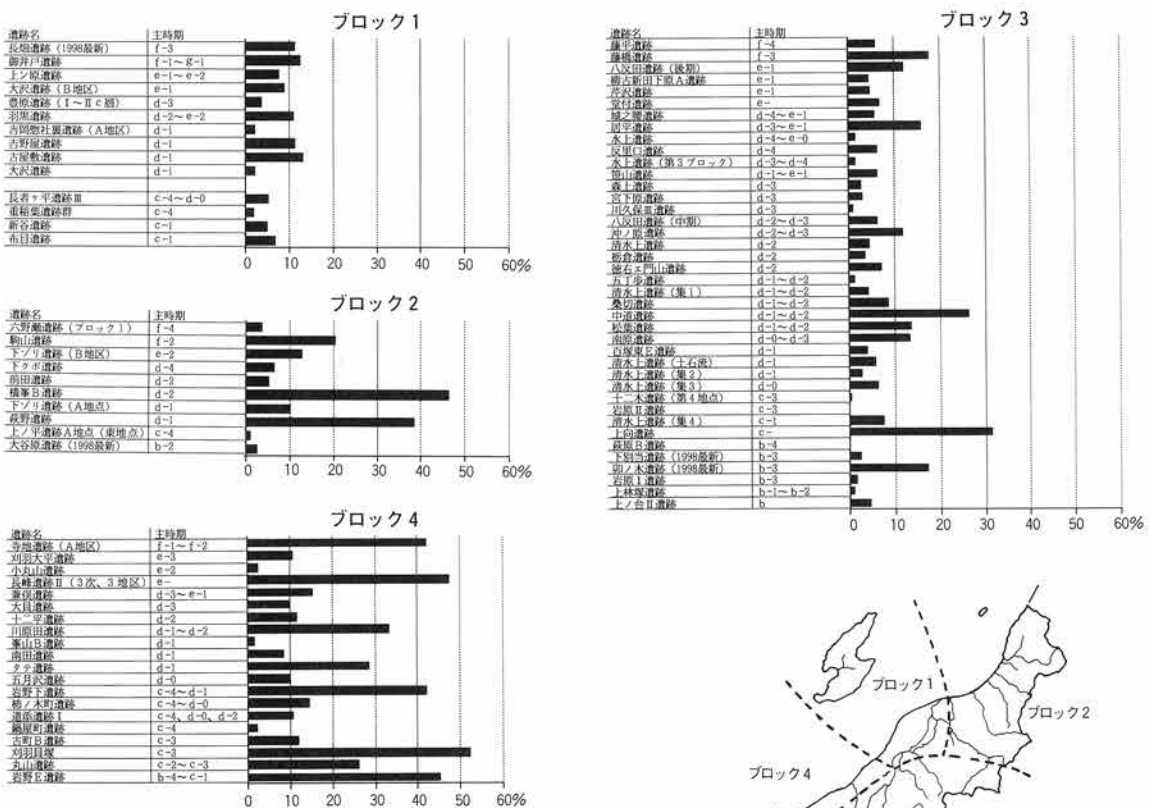
または地域における中核的集落で、遺跡存続の時期幅も比較的長いのが特徴である。これらの遺跡は存続時期が長いがゆえ、生産の中心時期とそれ以外の時期の様相が不明瞭で、今後、遺跡内の詳細な検討により画期細分の可能性を秘めている。

以上が新潟県内の縄文時代前半期の生産遺跡を中心とする状況であるが、富山県内の状況〔山本1991〕と大まかには似たような様相（Ⅰ期 南太閤山Ⅰ遺跡〔山本1986〕・極楽寺遺跡〔富山県教育委員会1965〕、Ⅱ期 馬場山遺跡群〔山本1987〕、Ⅲ期 境A遺跡〔前掲1990〕）と考えられる。しかし、詳細については細部の検討が必要となろう⁹⁾。

3 消費遺跡の状況

草創期から早期にかけては石器組成において不明瞭な遺跡が多く、実態はつかみにくいが、蛇紋岩製磨製石斧は小瀬が沢洞窟遺跡2層¹⁰⁾〔中村ほか1964〕、卯ノ木遺跡¹¹⁾〔中村ほか1963〕、岩野E遺跡¹²⁾〔前掲1986〕、岩野A遺跡¹³⁾〔前掲1986〕などで断片的な資料を上げることができる。しかし出土量は相対的に多くなく、不明な点が多い。

第6図は石鏃・尖頭器・石錘・石錐・石匙・篋状石器・打製石斧・磨製石斧・磨石類・石皿・砥石・台石の合計¹⁴⁾から磨製石斧の比率を県内を四つの地域に分け〔鈴木1996〕、早期から晩期の状況をみたものである。地域的には10%以下の低率の遺跡が多いブロック1・3と、10%を超えさらに20~30%を超える高率の遺跡がみられるブロック3・4とに分けられる。対象とした遺跡の中には磨製石斧生産遺跡も存在す



第6図 12器種における磨製石斧の割合

るが、これを除いても地域的な差は解消されない。

時期的には不明瞭ながらブロック2の大谷原遺跡・上ノ平遺跡A（東地点）、ブロック3の上林塚遺跡・岩原I遺跡・下別当遺跡・萩原B遺跡・上ノ台II遺跡など後続時期に比べ低率である。また、遺跡数の増減（表3）も合わせて考えれば、全国的な状況と同様に中期に増加のピークが認められ〔小熊1996〕、遺跡の規模も大型化し石器出土数も多くなることから、前述の比率と合わせ磨製石斧の生産は中期頃極致に達したものと想像される。

第7図は出土磨製石斧の内、蛇紋岩製のものが占める割合を各報告書の記述から求めたものである。全て蛇紋岩製で占められる遺跡から1割に満たない遺跡など様々であるが、4割以上を占める遺跡が多く、多量に流通していたことがわかる。不明瞭ながら早・前期に比率が高く、その後、徐々に低率になる傾向がみられ、後述するような中期中葉以降、各地に地元石材を用いた磨製石斧生産が開始され、蛇紋岩製のものにとって代わる状況が理解できる。

4 生産遺跡形成の要因

蛇紋岩製磨製石斧の生産が中期初頭（II期）以降、新潟県南西部および富山県北東部の原石産出地近隣に集中する段階（II・III期）と、それ以前の原石が遠隔地に運ばれ、中・小規模の生産を行う状況（I期）を生む背景について若干、触れてみたい。

I期の生産遺跡は今のところ、いずれも海岸部に分布する。この海岸部への分布が将来の資料増加により訂正される可能性は十分考えられるものの、海岸部と山間部の消費遺跡での磨製石斧の出土状況〔鈴木1996・1998〕および原石搬入の労力などから、ある程度、この分布に妥当性が存在すると考えた。前期以前の山間部では磨製石斧が占める割合は低く、その中で蛇紋岩製のものが一定量は入るものの

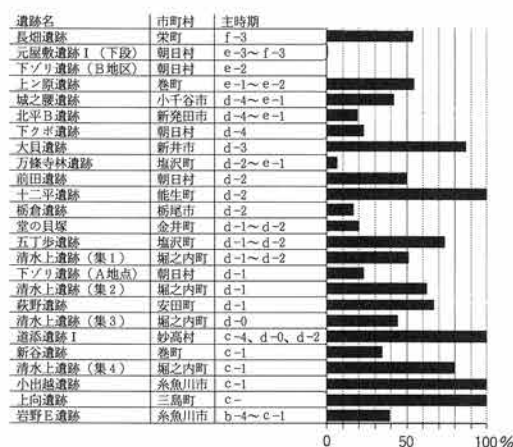
（清水上遺跡集落4〔鈴木・高橋1996〕）、磨製石斧自体その需要はあまり期待できず、需要はむしろ海岸沿いの砂丘・平野部または隣接する丘陵部で高かったであろう。

生産遺跡が原産地を離れ立地する要因としては、磨製石斧の需要と供給、そしてその間を司る流通の状況が密接に関係するものと考えられる。石器製作には製作中のアクシデントによる失敗があり、遠隔地の原石を搬入し生産することは、原石搬入の労力を考えた場合、効率的な生産とは言えず、大量生産には不向きである。しかし、消費遺跡の需要に関しては前述の通り、中期以降の広範囲かつ多量な分布に比べ、海岸部を中心とし、量的にも少ないと言えよう。言わば線状にある程度限定された分布と言える。そして、需要頻度の高い線状の範囲に点在する生産遺跡は、中・小規模的な生産でも消費遺跡の需要の規模や主たる流通の範囲から十分機能でき得たと考えられよう。原石が遠隔地である運搬上のハンデも、生産遺跡が海岸部に近接することから舟の利用が考えられ、同時に海岸部での需要の高さは舟の製作に傾倒した可能性を秘めるものである。おそらく、海上または砂丘後背湿地などを利用した舟での行き来が頻繁に成さ

表3 遺跡数（小熊1996）

時代	地域	新潟県内 全 域
旧石器時代		57 (215)
縄文時代	草創期	14 (106)
	早期	49 (106)
	前期	145 (289)
	中期	753
	後期	543
	晩期	140
	不明	540

新潟県教育庁行政課（1980）から集計、旧石器時代・縄文時代草創期の（ ）内は小熊・立木（1994）、早期・前期は駒形ほか（1984、1958）から集計



・主な時期の凡例
草創期 a 早期 b 前期 c 中期 d 後期 e 晩期 f
（初頭0 前葉1 中葉2 後葉3 末葉4）

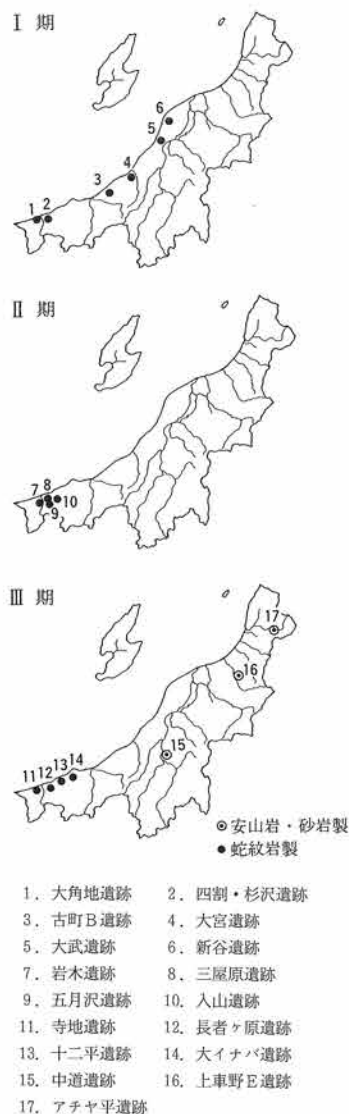
第7図 蛇紋岩製磨製石斧の占有率

れていたであろう。

Ⅱ期は、大規模生産遺跡が出現する中期前・中葉への移行期の様相を示す。中・小規模の遺跡が新潟県南西部から富山県北東部の段丘および丘陵上に林立し、磨製石斧生産を開始する。Ⅰ期に拡散して存在した生産遺跡が一举に原石産出地域に集中するもので、大遺跡が形成される中期前・中葉の前段階として重要である。遺跡数の増加および磨製石斧の保有率の増加など、旧体（Ⅰ期）の生産では高まる需要に答えることはできず、より効率的な大量生産を図るべく、生産遺跡の原石地への集中が試みられたものと思われる。これら生産遺跡の集中は、同時に消費遺跡との距離を大きく隔てると言う相反する結果をもたらすが、実際は遺跡間ネットワークの強化によって実質的距離は縮んだと考えたい。遺跡間ネットワーク強化の肯定材料の一つとして、中期初頭から前葉の北陸系土器（新保・新崎様式）の広域拡散〔加藤1988〕とその浸透があげられる。系統別土器の比率分析を試みた山間部の堀之内町清水上遺跡では、北陸系土器の占める割合が中期初頭において古い順から52%→62%→86%、次の中期前葉（集落跡2）で88%→63%→41%、中期中葉で30%→15%→5%と推移し、中期初頭から前葉にかけて比率を高め中期前葉の古段階をピークとし、その後徐々に減少する結果を得た〔寺崎1996〕¹⁰⁾。一方、前期後半では『主体をなすものは関西・北陸系の土器群で、この土器群は西蒲原地域を東限として佐渡島も含めた海岸・平野部に分布しており、魚沼地方や頸南地域などの山間部に多く認められる関東系の土器群とは対照的な分布を示している。』（寺崎1996）など北陸系土器が前期後半期には海岸部へ進出し、中期初頭および前葉にかけて山間部の内陸深くまで浸透するさまがみてとれる。これら土器の分布状況の推移は遺跡間ネットワーク

の拡大および強化の側面も持ち合わせていると考えられ、中期初頭以降、拡大・強化しつつあるネットワークにのり生産遺跡の集中が生み出した消費遺跡との距離を克服したものと思われる。言い換えればネットワーク（流通体制）の裏付けがあったからこそ、生産遺跡の集中もなし得たのである。Ⅰ期で指摘した海上または砂丘後背湿地などを利用した交通網がさらに展開すると同時に、陸上ルート of 醸成もなされ、ここに内陸部における磨製石斧流通基盤が整ったと考えたい。そして、このような情勢の中、はじめて、原産地周辺で磨製石斧生産に極めて傾倒した集団存続の条件整備が整ったと考えられよう。しかし、その生産体制は始動したばかりで、生産遺跡の規模からして、消費地の要望を十分満たしきってはいなかったと推測される。そして、中期初頭から中葉を中心とする擦切石斧〔金子前掲、前山前掲〕は自給的生产を基盤とし、これらの生産体制が西頸城地方（生産遺跡）のいまだ不十分な生産量や流通体制を補ったものと考えられる。なお、擦切石斧は後期にまで認められるとのことであるが、大方が中期中葉までで、Ⅲ期にピークをむかえる西頸城地方（生産遺跡）の生産体制と時期的な一致をみせ、生産体制の充実および流通網の整備が整った後、徐々にその姿を消していったと考えられる。

Ⅲ期はⅡ期で形成された原産地密着形の生産体制の基盤を醸成し、規模の拡大が図られる時期である。



第8図 磨製石斧生産遺跡の分布

生産遺跡は長者ヶ原遺跡や境A遺跡のように大規模なものや、十二木遺跡や大イナバ遺跡のように大規模とは言えないまでもそれに準じるもので大勢を占める。もちろん小規模で自給自足的なものがまったくないと言うわけではなく、今後の調査で発見される可能性はあるが、今までの例から大規模遺跡が核になって生産していくものと理解される。この背景として前述の遺跡間ネットワークのさらなる充実、遺跡数の増加および遺跡規模の大型化、消費遺跡の拡散・拡大、そして需要の高まり等が上げられよう。新潟県ではこの頃、山間部で磨製石斧の保有率が高まっており、打製石斧の減少傾向と反比例する。また、これらの傾向は山間部よりその縁辺の丘陵部で早い展開をとげる〔鈴木1997〕。このような現象は、従来海岸部で使用頻度の高かった磨製石斧が、Ⅱ期以降生産遺跡が原石産出地周辺に集中出現し、大量生産の足掛りを形成するのと期を一にし、磨製石斧の需要が海岸部→丘陵部→山間部へと拡散・拡大していったものと考えられよう。これら消費遺跡の拡大と需要の高まりは、もはやⅠ期のような生産量や生産体制およびⅡ期のような生産量ではまかないきれなかったものと考えられ、ここにⅡ期から始まる原産地密着型の大量生産体制のさらなる大規模化が図られたものと考えられる。

5 もう一つの生産地帯

新潟県の消費遺跡出土の磨製石斧の石材には、蛇紋岩とそれ以外とに大きく分けた場合、一方で全てが占められることは稀で、両者が共存する場合が一般的である。磨製石斧の生産と流通を考える場合、両者（蛇紋岩とそれ以外）を切り離して論ずることはできない。

新潟県の北部において緑色の安山岩（または玄武岩）や粗粒安山岩と呼ばれる石材を用い、磨製石斧の生産をおこなっている遺跡が多く発見されている。製品は消費遺跡に流通しているものと推定される。生産遺跡の時期的上限は、現在のところ中期中葉の上車野E遺跡〔鶴巻ほか1994〕であり未成品が多量に出土し、生産工具も整っている。その他、三面川流域〔横山ほか1976、川村ほか1995、前掲1997〕や新発田市周辺〔田中ほか1982、関1972、田中ほか1992、関1980、鶴巻ほか1997〕などで生産されており中期中葉以降、晩期に渡り活発に生産をおこなっている。生産工程および形態の特徴、消費遺跡への流通の問題等¹⁷⁾、体系的な整理は今後の課題であるが、生産遺跡の分布は現在のところ阿賀野川以北と大きくとらえることが可能である。北部以外でも、最近調査された長岡市中道遺跡（中期中葉～晩期）で磨製石斧が生産されている。石材は砂岩および安山岩である。細かな生産時期および生産規模等興味深く、正式報告を待って再度、中道遺跡が含まれる中越地区の動向を検討してみたい。

磨製石斧が複数石材で構成する消費遺跡では、小型品に蛇紋岩製の出土頻度が高い傾向が一般的で、蛇紋岩製品を機能的に他と区別していた可能性がある。また、中期後葉～後期初頭の富山県岩峯野遺跡〔池野ほか1976〕¹⁸⁾では硬砂岩製の磨製石斧を生産し、蛇紋岩製のものを搬入している。両者の形態差は明瞭ではないものの蛇紋岩製に小型品が多く、硬砂岩製は大型品が多いとの指摘がなされ、石材による選択性がみられる。しかし、法量的に両者が重複する部分が多いことも事実である。

蛇紋岩製磨製石斧の生産遺跡においても完形品の法量は境A遺跡で4種類、馬場山遺跡群においても概ね4種類に分けられ、さらに、この法量差は未成品の段階ですでに存在し、器種の分化とみられる。また、後期後葉から晩期後葉を主体とする朝日村元屋敷遺跡の石斧埋納遺構からは長さ18cm（1点）、11～13cm（3点）、9cm（1点）の5点セットで安山岩製の磨製石斧が出土し、生産した器種の規格と考えられている〔高橋・滝沢1997〕。この内、最小規格の9cmは寺地遺跡の大型品の最小値に近く、境A遺跡・馬場山遺跡群の2類中に含まれる。寺地遺跡の大型・小型の境は長さ8cm、境A遺跡・馬場山遺跡群の2類以下に

は、6 cm前後の3類、3 cm前後の4類が存在し、この小型サイズの磨製石斧は元屋敷遺跡では積極的に生産されなかったことになる。同じく生産遺跡である後期後葉を主体とする新発田市中野遺跡では、長さ8 cm以上の大型品（未成品も含む）は210点中、蛇紋岩製がわずか1点、それ以下の小型品（未成品も含む）は7点中、4点までが蛇紋岩で、小型磨製石斧の中において、蛇紋岩の優位性があらわれている。

これらの傾向は生産遺跡であるがための特徴と捉えられないこともないが、魚沼地方の消費遺跡（五丁歩遺跡、清水上遺跡、城之腰遺跡〔藤巻ほか1991〕）でも、大型のものが定量含まれるが蛇紋岩製が小型に偏る傾向にある。そして、三面地区の中期前葉を主体とする下ゾリ遺跡〔富樫ほか1990〕では、磨製石斧13点中、蛇紋岩製3点、中期中葉を主体とする朝日村前田遺跡〔田海ほか1993〕では30点中、半数が蛇紋岩、中期後半の下クボ遺跡〔富樫ほか1991〕では13点中、蛇紋岩製3点と中期の時期幅の中で増減がみられる。もちろん遺跡の内容・性格による現象とみられないこともないが、仮にこの比率の推移が当該地方における一般的傾向であるとするならば、生産遺跡の動向と概ね一致する。つまり、中期前葉は蛇紋岩製磨製石斧生産地帯ではⅡ期ないしⅢ期の始め頃に相当し、本格的な大量生産の前夜ないし開始初期と考えられ、その生産量もピークに達していない。三面地区という遠隔の地域へは後続時期（Ⅲ期）に比べ製品の流入は少なかったろうと推測される。Ⅲ期に相当する前田遺跡に至って本格的な大量生産を背景に蛇紋岩製磨製石斧が多量に流入する。この遺跡では8 cm以上の大型品の割合が多く、小型・大型をセットで搬入していたと考えられる。次の下クボ遺跡の時期は蛇紋岩製品の大量生産は継続されるが、地元製品の充実により蛇紋岩製品の搬入は著しく抑えられ、小型品に極めて偏った搬入へと変わっていくものと考えられる。

このように、石質による法量の選択性は、後続時期および遠隔地にいくにしたがいより明瞭となる可能性が存在する。寺地遺跡の使用痕観察によれば、小型品は片刃指向が強く「手斧」として木工細部の加工に用いられた可能性が高いとのことで〔阿部1967〕、一連の木材加工の道具仕立ての中において蛇紋岩製の小型品の有効性は遠隔地においても認知されていたものと考えられる。この優位性はおそらく石材の性質に因るところが大きいと思われる。

北部の生産遺跡は西頸城地方の生産遺跡で製作された製品を十分意識し、生産・流通が軌道にのった段階においても小型磨製石斧における蛇紋岩製品の有効性を認識し、あえて同形態の製品を積極的に作ることはせず、機能性において代用の効く大型サイズの製作に専念したのであろう。

6 ま と め と 課 題

新潟県における縄文時代前半期の蛇紋岩製磨製石斧の生産および流通に関し述べてきた。ここでそれらを要約しまとめにかえたい。

- ① 生産遺跡に関しては、今のところその出現を縄文時代前期前葉に求めることができる。
- ② 生産遺跡の分布状況および生産の規模から、Ⅰ～Ⅲ期の大まかな画期が見い出せた。
- ③ 生産遺跡の各々の画期は、大量生産（生産）および大量流通（供給）達成のための展開と見られ、その背景には消費地の需要の増大、そして流通体制の整備が不可欠であった（需要と供給のバランスおよびその関係を良好に保つ流通体制の整備が成しえた結果と予想される）。
- ④ 中期初頭～前葉の北陸系土器の広域分布および浸透が、流通体制の整備に一役買ったと考えられる。
- ⑤ 遠隔地（新潟県北部）への大型品の流通は、中期後葉以降急激に減少し、小型品のみが主に流通すると想定される。その要因として新潟県北部での磨製石斧生産の充実があげられる。

以上が簡単ではあるが本紙の要点である。各期における生産遺跡の展開は消費遺跡の様相と密着した動

きを示し、需要と供給のバランスおよびその関係を良好に保つ流通体制の整備が成しえた結果と予想される。このような需要と供給、それを円滑に導く流通体制の整備は縄文社会の経済行為の現われとして理解されようが、同時に相互付与の社会的基盤に立着した行為と解され、近隣の集落および集団との関係維持もまた重要なウェイトを占めていたものと考えられる。

なお、今回、筆者の勉強不足のため縄文時代後半期の状況を示すことができなかった。そして、製作技術や形態変遷などの基礎データの提示に欠けたことも事実である。また、石質から見ていまだ生産地や生産体制が不明な石斧の存在も今後究明すべく課題の一つであり、消費地が磨製石斧を欲する直接的な要因についても明解な答えを用意できないのが現状である。これらの課題に対し私見がまとまった段階をもって、機会あるごとに成果を示したいと考える次第である。

最後に本紙を記すにあたり秦 繁治氏、駒形敏朗氏、寺崎裕助氏、前山精明氏、田中耕作氏、高橋保雄氏、田海義正氏、木島勉氏、品田高志氏、遠藤佐氏、小熊博史氏、滝沢規朗氏の諸氏から資料の見学の便宜および数多くのご教示をいただいた。また、上川村教育委員会、長岡市立科学博物館には新資料（大谷原遺跡）や修正資料（卯ノ木遺跡・下別当遺跡）の掲載について便宜を図っていただいた。ここに記して感謝申し上げます。

（1997年6月 稿了）

表4 12器種の組成

遺 跡 名	ブロック	石鏃	尖頭器	石鏃	石匙	打斧	石鏃	磨斧	磨石	石皿	砥石	台石	石鍾	主 要 時 期
布目遺跡	1	5	1	1	4	2		4	27	2	10		5	c-1
新谷遺跡	1	5	1	1	5	3		64	581	147	109		404	c-1
重福葉遺跡群	1	11		7		1		1	16	4	10		5	c-4
長者ヶ平遺跡Ⅲ	1	250	10	19	8			30	230	20	1			c-4~d-0
大沢遺跡	1	100		2	6	2		5	51	10	33		13	d-1
古屋敷遺跡	1	4						3	15	1				d-1
吉野屋遺跡	1	64	2	6	8	7		34	159	2			17	d-1
吉岡惣社裏遺跡(A地区)	1	179	2	4	3	4		8	102	12	1		36	d-1
羽黒遺跡	1	11	1	3		5	1	13	57	17	9		2	d-2~e-2
豊原遺跡(I~II C層)	1	16			1			7	32	22	92		17	d-3
大沢遺跡(B地区)	1	14	1					7	36	20	1			e-1
上ノ原遺跡	1	79	2	6		1		11	20	10	15		2	e-1~e-2
御井戸遺跡	1	105		6	2			20	24	4				f-1~g-1
長畑遺跡(1998最新)	1	45	4	7				11	30	1				f-3
大谷原遺跡(1998最新)	2	18	6	67	38	21	65	9	206	27				b-2
上ノ平遺跡A地点(東地点)	2	13		4	1	1	20	1	34	1	1		45	c-4
萩野遺跡	2	2			2	1		15	13			4	2	d-1
下ゾリ遺跡(A地点)	2	2	2	3	20		20	13	66	3				d-1
横峯B遺跡	2	7	1			4	1	19	9					d-2
前田遺跡	2	9	3	12	19		6	30	354	119	20	2	1	d-2
下クボ遺跡	2	11	1	4	8			13	128	34	3			d-4
下ゾリ遺跡(B地区)	2	2		1	3		4	4	17					e-2
駒山遺跡	2	21	3	3	7	5	19	25	39					f-2
六野瀬遺跡(ブロックI)	2	61		41	2			5	16	5	2			f-4
上ノ台II遺跡	3	9			1	19		2	11		4			b-
上林塚遺跡	3	3				14		1	39	4		42		b-1~b-2
岩原I遺跡	3	16	4	1	2	118	70	10	471	3	5	45		b-3
卯ノ木遺跡(1998最新)	3	10	1	9	2	1	3	6	3					b-1~b-2
下別当遺跡(1998最新)	3	3		11	5	7	61	2	5					b-3
萩原B遺跡	3		3	1		5			12	5	3			b-4
上向遺跡	3	5			1			5	5					c-
清水上遺跡(集4)	3		1	1		10		5	32	6	2		11	c-1
岩原II遺跡	3	2		1		24			39	1				c-3
十二木遺跡(第4地点)	3	14	2	3	5	123		1	129					c-3
清水上遺跡(集3)	3	4		7	1	32		9	77	6	7	1	4	d-0
清水上遺跡(集2)	3	3		10	3	66		8	171	17	17	1	6	d-1
清水上遺跡(土石流)	3	4	1	10	1	65		8	44	6	2			d-1
百塚東E遺跡	3	1				11		1	5				9	d-1
南原遺跡	3	18		1	5	223		57	82	38			5	d-0~d-3
松集遺跡	3	4	1			46		11	19					d-1~d-2
中道遺跡	3	1			2	18		15	7	5			9	d-1~d-2
桑切遺跡	3	2		2	2	14		5	30	2			2	d-1~d-2
清水上遺跡(集1)	3	45	8	44	10	1440		135	1341	146	158	10	4	d-1~d-2
五丁歩遺跡	3	20		59	16	834		27	1053	45	208	16	4	d-1~d-2
徳石エ門山遺跡	3	2	1			30		4	13	6			1	d-2
板倉遺跡	3	21	6	2	9	217		12	23	4		1	50	d-2
清水上遺跡	3	26	10	49	1	398		47	491	51	10	4	1	d-2
沖ノ原遺跡	3	25	2	4		153		55	177	45	1			d-2~d-3
八反田遺跡(中期)	3	21		4	2	131	2	13	33	4	2	1		d-2~d-3
川久保Ⅲ遺跡	3					64		1	37	2				d-3
宮下原遺跡	3	12		1		92		29	791	2	24		4	d-3
森上遺跡	3	23	8	12		308	90	20	232	22				d-3
笹山遺跡	3	72	35	4	3	1106		143	788	97	8		1	d-1~e-1
水上遺跡(第3ブロック)	3	21		2	2	30		4	174	15	2		2	d-3~d-4、e-0
反里口遺跡	3	58	5	1	1	88		16	83	4	1			d-4
水上遺跡	3	3						2	132	3				d-4~e-0
居平遺跡	3	14				89		24		12		11		d-3~e-1
城之腰遺跡	3	179	24	101	8	373		316	2928	80	23	786	688	d-4~e-1
堂付遺跡	3	10				52		6	6	1			13	e-
芹沢遺跡	3	40		3	5	3		10	68	8			76	e-1
柳古新田下原A遺跡	3	3		2		75		22	370	12	7		18	e-1
八反田遺跡(後期)	3	42	1	8	1	61	1	22	43	2		1	1	e-1
藤橋遺跡	3	219	15	34	1	7		120	173	51	53		5	f-3
藤平遺跡	3	190			8	5		14	8	14			2	f-4
岩野E遺跡	4				1	9		28			7		17	b-4~c-1
丸山遺跡	4	2			1			6	9	1	3		1	c-2~c-3
刈羽貝塚	4	6						13				1	5	c-3
古町B遺跡	4	47	5	14	23	3		73	204	41	208			c-3
鍋屋町遺跡	4	15						3	100	5	1		8	c-4
道添遺跡I	4		1	2	1	11		2		2				c-4、d-0、d-2
柿ノ木町遺跡	4	10		2		3		12	43	4	7	2		c-4~d-0
岩野下遺跡	4	1				10		13	5				2	c-4~d-1
五月沢遺跡	4	12		1	3	15		25	102	13	55		20	d-0
タテ遺跡	4					5		8	14				1	d-1
南田遺跡	4	1	1		1	10		7	59	3				d-1
峯山B遺跡	4					1		1	52	4	8			d-1
川原田遺跡	4					2		15	20	2	2		4	d-1~d-2
十二平遺跡	4	11			1	284		272	639	306	784	9	15	d-2
大貝遺跡	4	4			2	27		15	78	24				d-3
兼保遺跡	4	16		1	1	23		13	28	2				d-3~e-1
長峰遺跡II(3次、3地区)	4	17			2	17		35	0				3	e-
小丸山遺跡	4	104	3	3	1			3	7				1	e-2
刈羽大平遺跡	4	111		10	5			20	34	1	6		3	e-3
寺地遺跡(A地区)	4	37	5	13		10		465	295	17	247	2	11	f-1、2

主時期 aは草創期 bは早期 cは前期 dは中期 eは後期 fは晩期 (0は初頭 1は前葉 2は中葉 3は後葉 4は末葉)

(1998最新)とは1998年に資料を実際に見て石器数を修正したもの。

長峰遺跡II(3次、3地区)の磨石類「0」は出土しているが、数量が不明である。

註

- 1) 境A遺跡(山本1990)、清水上遺跡(高橋1990)、五丁歩遺跡(高橋1992)などで、採取可能石材および製作工程資料の分析により搬入石器や自遺跡製作石器の区別を試みている。
- 2) 蛇紋岩、流紋岩、砂岩、凝灰岩、ヒン岩、頁岩、閃緑岩、安山岩、輝緑安山岩、ハンレイ岩、石英ハン岩、チャート、変成岩、粘板岩、緑泥片岩、泥岩、ヘンマ岩、千枚岩、粗粒玄武岩、石英粗面岩、花崗岩などの多くの名称が見られる。
- 3) 特に新潟県の場合、地形的な特徴から県境が山岳地帯に囲まれ、そこには概ね分水嶺が存在することから、石器石材が県下全域で豊富で、その種類も多い。多種類の石材に依存する縄文時代において、石材研究は立ち遅れた分野の一つである。
- 4) 富山県北東部からの可能性も考えられよう。
- 5) 蛇紋岩の産出地は糸魚川市周辺以外にも県下に存在するが、斧の用途に耐えられる強靱なものの存在は報告されていない。
- 6) これら生産遺跡では蛇紋岩以外の石材も少量出土するが、ほとんどが蛇紋岩製である。
- 7) 前期後半の関東地方の例では、1住居当たり2点を超えない状況が見られると言う(早川1938)。また、新潟県タテ遺跡(中期前葉)の場合、住居1軒に対し1.6本の割合で出土している(高橋1985)。朝日村元屋敷遺跡では法量差のある5本の石斧がピットより出土し(高橋・滝沢1996)、馬場山D遺跡では完形品の法量に四つのピークが認められるなど4ないし5本の道具セットとして捉えられる可能性がある。このように消費遺跡の2本弱、生産遺跡の4・5本、両者には倍以上の開きがあるものの、このあたりが数量的ボーダーラインと考えられよう。しかし、実際の調査にあたっては遺跡の遺存状況や住居跡の認定、時期の限定など多くの問題を含んでおり、数量的根拠の提示は難しい。
- 8) 早期段階では原産地に近い糸魚川市岩野E遺跡(小池 1986)があげられる。小型の偏平礫を素材に最小限度の加工を施した小型の全面および部分磨製の石斧が出土するものの、おそらく、自分で消費する分のみで、他遺跡への搬出は到底考えられない状況である。その他、石材は異なるが小千谷市堂付遺跡(内山 1996)では打製石斧として報告しているなかに閃緑岩・硬質砂岩製などの磨製石斧の未成品と考えられる資料がみられ、同一分布を示す土器から早期末～前期初頭の時期幅が与えられる。生産の規模は不明であるが自給自足の生産と考えられる。
- 9) I期の富山県の遺跡は生産関連遺物の量から自給自足の産である。新潟県の該期遺跡は出土量から他遺跡に成品および未成品を搬出したと考えられる。
- 10) 出土土器から早期～前期前半に比定される。小型の片刃磨製石斧で擦切痕を残す。なお、室谷洞窟遺跡(中村ほか1964)11・10・8層出土の「蛇紋岩?」および「蛇紋岩」と報告されているものは、実見の結果、筆者は蛇紋岩ではないと考えている。
- 11) 卯ノ木遺跡(縄文草創期～早期)は押圧縄文・押型文・沈線文土器に擦切磨製石斧・蛇紋岩製の小型片刃の磨製石斧(1点?)が出土している。報告者は押型文土器に伴う典型的な石器と称している。
- 12) 早期中葉から前期後半までの各期の遺物が出土しているが、時期別にその分布が異なる状況をもち、石器の分布も土器の分布にほぼ合致する。GF11区の押型文・田戸上層式土器が出土した一群から小型磨製石斧1点が出土しており、偏平礫を半載し部分的に研磨を加え、側辺の面加工は見られず素材の形状をあまり変えない石斧である。また、早期後葉の極楽寺式土器が出土したK9区を中心とする中に小型磨製石斧1点がある。側辺の面加工は認められない。
- 13) 出土石器は磨製石斧、礫石錘、玦状耳飾りなどが出土している。磨製石斧の中には側面が不十分な小型磨製石斧と側辺に面をもつ定角式に近い石斧が出土している。
- 14) 12器種選定にあたっては遺跡間なるべく実態にあった比率を出すため、多数の報告者に概ね共通認識があると思われる器種のうち、抽出がほぼ正確におこなわれるだろうと思われるものを選んだ。そして、そのなかでも板状石器・三脚石器のように多量に出土する遺跡と出土しない遺跡のあるようなもの、または三角錐形石器など、出土時期に偏りがあるものは除外した。
- 15) 寺地遺跡(阿部1987)の報文にも同様の指摘がある。
- 16) この清水上遺跡の状況が普遍的なものであるか否かについては、多くの遺跡で同様な視点での分析を必要とする。
- 17) 阿部氏(1997)は新発田市中野遺跡を分析する中で、三面川流域の生産遺跡との距離間および石斧の見返りと考えた半透明頁岩や硬質頁岩の産出地の距離から、磨製石斧の流通範囲を半径30kmを想定している。しかし、新潟県の磨製石斧生産地帯は現在のところ大きく北部と西部の隅に偏り、中間地帯では現在のところ長岡市中道遺跡のみである。この生産遺跡が少ない中間地帯への流通も考えていかなければならない。これは同心円の分布および流通範囲の既成概念から、限定方向への展開および経済圏設定の可能性を指摘するものである。県内の石器組成における地域差は、より広域的な範囲で捉えられ、そこに見られる石器組成の大きな特徴は、その広域圏がもつ自然環境に起因した生業の在り方を示す。出土量の卓越した石器は、それが従事した食物獲得および加工、そして必要不可欠な工具および構造物の作成など、その生産は自家消費以上と見ることも可能で、この余剰品は他の集団と交換することにより経済的価値を生み出す。経済的価値にまで高められた余剰品は、もはやその集落ないし広域圏の特産品と位置付けられ、そこに、特産品同士を交換する広域的経済圏の設定も考えていかなければならない。具体的には鈴木(1996)が指摘したブロック1から4といったような広域間での経済交流の可能性がある。

18) 中期後葉～後期前葉にかけて常願寺川沿いの河岸段丘や扇状地で砂岩製の磨製石斧生産が活発におこなわれるという。その他、中期後葉～後期後葉の時期幅をもつ東中江遺跡(岸本ほか 1982)、中期中葉～後葉を主体とする花切遺跡(狩野ほか1988)など時期幅が大きく一概に両者を比較できないが、蛇紋岩を搬入し硬砂岩製を製作している。

引用・参考文献

- 浅井芳伸 「巻町新谷遺跡における磨製石斧製作工程の復原」『巻町史研究Ⅴ』巻町
- 阿部朝衛 1987「第6章 磨製石斧生産の様相」『史跡寺地遺跡』青海町
- 阿部朝衛 1997「石材の獲得と磨製石斧の生産」『新潟県北部地域における縄文時代後・晩期の研究—新潟市中野遺跡の共同資料調査 北越考古学 第8号』北越考古学研究会
- 甘粕 健・小野 昭・山川史子ほか 1988『丸山遺跡発掘調査報告書』大潟町教育委員会
- 家田順一郎ほか 1983『下田村文化財調査報告書第30号 藤平遺跡発掘調査報告書』下田村教育委員会
- 家田順一郎ほか 1983『下田村文化財調査報告書第20号 藤平遺跡発掘調査報告書Ⅱ』下田村教育委員会
- 家田順一郎ほか 1988『塩沢町文化財調査報告書第8輯 十二木遺跡』塩沢町教育委員会
- 家田順一郎・小林義広 1988『下田村文化財調査報告書第26号 桑切遺跡発掘調査報告書』下田村教育委員会
- 池田 亨 1981『原・居平遺跡』堀之内町教育委員会
- 池田 亨ほか 1981『六日町文化財調査報告書第3輯 宮下原遺跡』六日町教育委員会
- 池田 亨・荒木勇治 1988『大和町文化財発掘調査報告書第3輯 水上遺跡』大和町教育委員会
- 池田 亨ほか 1987『大和町文化財調査報告第2号 柳古新田下原A遺跡』大和町教育委員会
- 池田 亨ほか 1988『塩沢町文化財調査報告書第7輯 万條寺林遺跡』塩沢町教育委員会
- 池野正男・柳井 睦 1976『岩峠野遺跡』富山県教育委員会
- 石川日出志ほか 1981『安田町文化財調査報告(5) 横峯B遺跡』安田町教育委員会
- 石川日出志・増子正三・渡部裕之 1992『新潟県安田町文化財調査報告書12 六野瀬遺跡1990年調査報告書』安田町教育委員会
- 内山徹ほか 1996『新潟県埋蔵文化財調査報告書第78集 堂付遺跡』新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 江坂輝彌・石沢寅二・島田靖久 1977『津南町文化財調査報告書No.13 反里口遺跡』津南町教育委員会
- 江坂輝彌・渡辺 誠 1977『津南町文化財調査報告書No.12 沖ノ原遺跡』津南町教育委員会
- 遠藤孝司・江口友子ほか 1996「第Ⅴ章 百塚東E遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第78集 堂付遺跡・百塚東E遺跡・百塚西C遺跡・割目B遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 岡本 勇・加藤晋平ほか 1967「大貝遺跡の調査」『新潟県新井市における考古学的調査』立教大学・社会教育講座博物館
- 小熊 博 1994「布目遺跡」『巻町史 資料編1・考古』巻町
- 小熊博史ほか 1994『松葉遺跡』長岡市教育委員会
- 小熊博史 1996「新潟平野における旧石器・縄文時代の遺跡の立地とその変遷」『日本第四紀研究』35—3 日本第四紀学会
- 小野 昭・前山精明ほか 1988「巻町豊原遺跡の調査」『巻町史研究Ⅳ』巻町
- 小野 昭 1994「豊原遺跡」『巻町史 資料編1・考古』巻町
- 柏崎市教育委員会 1995『大宮遺跡現地説明会資料』
- 加藤三千雄 1988「新保・新崎式土器様式」『縄文土器大観』3 中期Ⅱ 小学館
- 亀井 功・本間信昭・望月正樹 1994「萩野遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第61集 萩野遺跡・官林遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 狩野睦・島田修一ほか 1988『花切遺跡』大山町教育委員会
- 川村三千男・富樫秀之・石川智紀・立木宏明 1995『朝日村文化財報告書第10集 元屋敷遺跡Ⅰ』新潟県朝日村教育委員会
- 神林忠克ほか 1997「野尻湖周辺の先土器時代遺跡について—高速道路関連調査の遺物整理中間報告—」『第9回 長野県旧石器文化研究交流会—発表資料—』
- 木島 勉 1992『平成3年度 遺跡発掘調査概報—五月沢遺跡・岩野B遺跡—』糸魚川市教育委員会
- 木島勉・山岸洋一 1997「長者ヶ原遺跡の縄文時代中期の集落について—遺構を中心として—」『新潟考古』第8号 新潟県考古学会
- 岸本雅敏ほか 1982『東中江遺跡』平村教育委員会
- 北村 亮ほか 1990「上林塚遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第56集 岩原Ⅰ遺跡・上林塚遺跡』新潟県教育委員会
- 北村 亮ほか 1990「岩原Ⅰ遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第56集 岩原Ⅰ遺跡・上林塚遺跡』新潟県教育委員会
- 計良勝範 1977『金井町文化財調査報告書第Ⅱ集 堂の貝塚』金井町教育委員会
- 小池義人ほか 1986「岩野E遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第45集 中原遺跡・岩野A遺跡・岩野E遺跡』新潟県教育委員会

員会

- 小池義人ほか 1986「岩野A遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第45集 中原遺跡・岩野A遺跡・岩野E遺跡』新潟県教育委員会
- 小林達雄ほか 1983『長者ヶ平遺跡Ⅲ』新潟県小木町教育委員会
- 駒形敏朗ほか 1994『南原遺跡』長岡市教育委員会
- 斎藤基生・金子拓男ほか 1974『森上遺跡概報』中里村教育委員会
- 斎藤基生・金子拓男ほか 1982『羽黒遺跡』見附市教育委員会
- 佐藤雅一 1987『湯沢町埋蔵文化財報告第8輯 萩原B遺跡』湯沢町教育委員会
- 佐藤雅一 1987『湯沢町埋蔵文化財報告第7輯 岩原Ⅱ遺跡』湯沢町教育委員会
- 佐藤雅一 1989『湯沢町埋蔵文化財報告第10輯 川久保Ⅲ遺跡』湯沢町教育委員会
- 佐藤雅一 1989『六日町埋蔵文化財報告第6輯 上ノ台Ⅱ遺跡』六日町教育委員会
- 佐藤雅一ほか 1991『見附市埋蔵文化財調査報告第8 山崎A遺跡』見附市教育委員会
- 澤田 敦・飯坂盛泰ほか 1994『新潟県埋蔵文化財調査報告書第64集 上ノ平遺跡A地点』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木俊成ほか 1988『新潟県埋蔵文化財調査報告第51集 小出越遺跡』新潟県教育委員会
- 鈴木俊成・寺崎裕助ほか 1996『新潟県埋蔵文化財調査報告書第72集 清水上遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会
- 鈴木俊成 1996「A 新潟県の石器組成の概要と清水上遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第72集 清水上遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会
- 鈴木俊成・高橋一功 1996「6 集落4の調査 (3)石器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第72集 清水上遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会
- 鈴木俊成 1998「縄文時代の石器組成—新潟県の縄文時代早期から晩期について—」『新潟考古学談話会会報』第18号 新潟考古学談話会
- 関 雅之 1972「加治川および坂井川流域の考古学的調査」『新発田郷土史』6 新発田市史編纂委員会（新発田市）
- 関 雅之 1980「原始・古代の新発田」『新発田市史』上巻 新発田市
- 高橋 保 1985『新潟県埋蔵文化財調査報告書第39集 タテ遺跡』新潟県教育委員会
- 高橋保雄ほか 1987『新潟県埋蔵文化財調査報告書第46 岩野下遺跡』新潟県教育委員会
- 高橋保雄 1990『新潟県埋蔵文化財調査報告書第55集 清水上遺跡』新潟県教育委員会
- 高橋保雄 1992『新潟県埋蔵文化財調査報告書第57集 五丁歩遺跡』新潟県教育委員会
- 高橋保雄・滝沢規朗 1996「奥三面遺跡群の調査について—元屋敷遺跡を中心に—」『平成8年度 新潟県市町村埋蔵文化財専門職員研修会』新潟県教育庁文化行政課
- 田中耕作・阿部朝衛・石川日出志 1982『新発田市埋蔵文化財調査報告第4 村尻遺跡Ⅰ』新発田市教育委員会
- 田中耕作 1985『新発田市埋蔵文化財調査報告第7 北平B遺跡・岡塚遺跡』新発田市教育委員会
- 田中耕作・鶴巻康志 1992『新発田市埋蔵文化財調査報告第14 館ノ内遺跡D地点の調査』新発田市教育委員会
- 谷 和隆 1994「信濃町日向林B遺跡の調査」『第6回 長野県旧石器文化研究交流会—発表資料—』
- 谷 和隆 1997「日向林B遺跡の整理」『第9回 長野県旧石器文化研究交流会—発表資料—』
- 親跡 喬 1988『図録 南田遺跡』中郷村教育委員会
- 親跡 喬 1992『図録 柿ノ木町遺跡』妙高村教育委員会
- 鶴巻康志・田中耕作 1994「上車野E遺跡」『平成5年度新発田市遺跡範囲確認報告書』新発田市教育委員会
- 鶴巻康志・阿部朝衛ほか 1997「新潟県北部地域における縄文時代後・晩期の研究—新発田市中野遺跡の共同資料調査—」『北越考古学 第8号』北越考古学研究会
- 寺崎裕助 1990「第九節 縄文土器にみられる柏崎の地域性」『柏崎市史』上巻 柏崎市
- 寺崎裕助 1996「第四章 まとめ 1土器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第72集 清水上遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会
- 寺村光晴ほか 1979『大角地遺跡』青海町教育委員会
- 寺村光晴・阿部朝衛ほか 1987『史跡寺地遺跡』青海町
- 田海義正ほか 1993『朝日村文化財報告書第8集 前田遺跡』新潟県朝日村教育委員会
- 十日町市博物館友の会 1992『火焔型土器のクニ—笹山遺跡出土品一括—』十日町市博物館
- 富樫秀之ほか 1990『朝日村文化財報告書第5集 下ゾリ遺跡』新潟県朝日村教育委員会
- 富樫秀之ほか 1991『朝日村文化財報告書第6集 下クボ遺跡』新潟県朝日村教育委員会
- 戸根与八郎・鈴木俊成ほか 1987『新潟県埋蔵文化財調査報告書第47集 川原田遺跡 宮ノ平遺跡ほか9遺跡』新潟県教育委員会

富山県教育委員会 1965『極楽寺遺跡発掘調査報告書』

長岡市 1992「藤橋遺跡」『長岡市史 資料編1・考古』

中島栄一ほか 1974『調査報告第5冊 吉野屋遺跡』新潟県立三条商業高等学校 社会科クラブ考古班

中島栄一ほか 1976『古屋敷遺跡』田上町教育委員会

中村孝三郎 1956「新潟県中魚沼郡津南町清津縄文早期下別当遺跡」『NHK』Vol.2 No.1 長岡市立科学博物館

中村孝三郎・小片保 1964『長岡市立科学博物館研究調査報告第6冊 室谷洞穴』長岡市立科学博物館

中村孝三郎・中島栄一ほか 1975『芹沢・八幡平遺跡緊急調査報告書』下田村教育委員会

中村孝三郎 1979『越後の石器』学生社

中村孝三郎・小林達雄 1963『長岡市立科学博物館研究調査報告第5冊 卯ノ木・貝坂遺跡』長岡市立科学博物館

中村孝三郎ほか 1990『三島町教育委員会調査報告第5冊 上向遺跡』三島町教育委員会

財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 1997『大武遺跡現地説明会資料』

秦 繁治・岡本郁栄ほか 1986『板倉町埋蔵文化財報告1 峯山B遺跡』板倉町教育委員会

秦 繁治ほか 1987「徳右エ門山遺跡」『小千谷市文化財報告第3集 徳右エ門山遺跡・中道遺跡・中道東遺跡』小千谷市教育委員会

秦 繁治・寺崎裕助 1990『十二平遺跡発掘調査報告書』能生町教育委員会

秦 繁治ほか 1992『古町B遺跡発掘調査報告書』吉川町教育委員会

秦 繁治・小林義廣ほか 1996『大イナバ遺跡発掘調査報告書』名立町教育委員会

早川正一 1983「磨製石斧」『縄文文化の研究』7 道具と技術 雄山閣

藤田亮策ほか 1960『栃倉遺跡』栃尾市教育委員会

藤田亮策ほか 1964『長者ヶ原』糸魚川市教育委員会

藤巻正信・伊藤恒彦ほか 1985「Ⅲ 刈羽大平遺跡、Ⅳ 小丸山遺跡」『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第5 刈羽大平・小丸山』柏崎市教育委員会

藤巻正信・田中靖ほか 1991『新潟県埋蔵文化財調査報告書第29集 城之腰遺跡』新潟県教育委員会

本間嘉晴 1987『吉岡惣社裏遺跡』真野町教育委員会

本間信昭・戸根与八郎・高橋陽子 1975『埋蔵文化財緊急調査報告書第4 長畑遺跡』新潟県教育委員会

本間信昭・室岡 博 1976『妙高高原町文化財調査報告書第1集 兼保遺跡』妙高高原町教育委員会

前山精明 1990『大沢遺跡』巻町教育委員会

前山精明 1994「重稲葉遺跡群」『巻町史 資料編1・考古』巻町

前山精明 1994「上ノ原遺跡」『巻町史 資料編1・考古』巻町

前山精明 1994「御井戸遺跡」『巻町史 資料編1・考古』巻町

前山精明 1994「新谷遺跡」『巻町史 資料編1・考古』巻町

室岡 博・寺村光晴 1960『鍋屋町遺跡』柿崎町教育委員会

室岡 博ほか 1994『道添遺跡Ⅰ』新潟県中頸城郡妙高村教育委員会

室岡 博・関 雅之・本間信昭 1984『長峯遺跡Ⅱ』新潟県吉川町教育委員会

八幡一郎 1958『新潟県文化財調査報告書第5（考古編）刈羽貝塚』新潟県教育委員会

山本 肇・竹田和夫 1988『新潟県埋蔵文化財調査報告書第52集 四割・杉沢遺跡』新潟県教育委員会

山本 肇・柳 恒雄 1988『新潟県埋蔵文化財調査報告書第52集 三屋原遺跡』新潟県教育委員会

山本正敏 1986『南太閤山Ⅰ遺跡』富山県教育委員会

山本正敏 1987『北陸自動車道遺跡調査報告 朝日町編3 馬場山D遺跡・馬場山G遺跡・馬場山H遺跡』富山県教育委員会

山本正敏 1990『北陸自動車道遺跡調査報告 朝日町編5 境A遺跡－石器編（本文）－』富山県埋蔵文化財センター 富山県教育委員会

山本正敏ほか 1991『北陸自動車道遺跡調査報告 朝日町編 境A遺跡』富山県教育委員会

山本正敏 1991「蛇紋岩製磨製石斧の製作と流通」『新潟県考古学会第3回大会発表要旨』新潟県考古学会

横山勝栄・田中真吾 1976『熊登遺跡』新潟県朝日村教育委員会

横山勝栄・田中真吾ほか 1978『朝日村文化財報告第4集 駒山遺跡』新潟県朝日村教育委員会

渡辺 誠・斎藤基生ほか 1984『津南町文化財調査報告書No.14 八反田遺跡』津南町教育委員会